

## 経済大国を達成はしたが

豊橋技術科学大学長

佐々木 慎一

Dr. Shin-ichi SASAKI  
President  
Toyohashi University of Technology

昭和20年8月をもって日本は15年に及ぶ長い戦争を終えた。それから40数年廃墟と飢餓の時代は嘗々たる先人の努力によって今日の状況に創り変えられた。日本の経済復興は、同じ民族が相戦うという悲劇が与えてくれたものの貴さを決して忘れてはならないにしても、25年にはじまる朝鮮戦争特需によるところが大きい。その後特需なき自立の時代を経て30年は戦後最良の年を謳い、もはや戦後ではないが人々の口にのぼる。

これ以後所得倍増政策、石炭から石油へのエネルギー革命そして家電製品を中心とする耐久消費材、プラスチック製品による日常生活の近代化がこれにつづく。

39年のオリンピックは日本の国際的地位への復活を告げる華やかな宴であった。43年はずいぶん西側諸国中GNPは第二位となる。そして48年日本の経済を根底から揺さぶるかにみえた石油危機は企業の徹底した合理化、技術革新によって切り抜けることができ、このあともう一度訪れる石油危機をも見事に乗り切ってゆるぎなき経済大国を実現させ以て今日に至っている。いま私たちは経済大国の齎す繁栄という光の中で生活をたのしんでいる。つい此の間までのくらしぶりと比較して何という変り様であろうか。

しかし40年代のはじめから顕在化してきた汚染、公害、環境破壊は止まるところを知らず現在の深刻な地球危機へとつながってきている。繁栄を光とすればこれらはまさに影。私たちはこの光と影の交錯するなかで生活を営んでいるといえる。経済大国そして技術文明の発達はたしかに私たちの生活を豊かにしてくれた素晴らしい光である。ただ近代文明の発達はその影の部分をも益々濃くしていったのである。300万年前に誕生したといわれる人類がホモサピエンスの名のとおりその知恵によって農耕牧畜を選択したのは1万年前である。これを発端としてその後の物質文明の進歩発達がつづく。そしてこの文明は緑を食いつぶしていった文明である。世界の四代文明（チグリス・ユーフラテス・エジプト・中国・インド）の跡地は今日どこをみても砂漠かそれに近い状態である。人類は自然という忠順な友のまもっていた緑の衣裳をかたはしからひき



はがしてきているのである。

燃えない、安い、無毒であるということでその便利さにのみ目を向けてさかんに使われてきたフロンは10年かけて成層圏に辿りつきそこでオゾン層に穴をあけはじめている。2万年前120ppmに過ぎなかった空気中の二酸化炭素は人類の生活々動に伴って漸増し、近時の工業化社会を迎えるや急増して400ppmに迫ろうとしている。かつて大気はあらゆるものを呑みこんでくれる、海洋はすべての汚れを浄めてくれる、大地は常に豊饒な実りを約束してくれると私たちは信じて疑わなかった。大気も海洋も大地も決して最後まで寛容ではくれないことが判ってきた。

文明の結果である物理的・化学的汚染にまして憂うべきは人の心の汚濁である。40年代はじめ消費は美德としてはやされ、GNP至上主義は消費・浪費へ向けて人の意識を変えることに成功した。日本人はつましさを失いモノを大切にしない風潮は今日極まれりというべきである。いわば物心両面に亘る汚染、汚濁が進行しているとみる。モノを大切にできない人がどうすれば隣人を大切にできようか。モノを大切に出来ない子供が身のまわりの動植物を慈しむことができようか。私たちはここで再び賢い消費者となるべく意識の革命を図らなくてはならない。使えるものはその寿命の尽きるまで使う。そんな意識を培ってゆかねばならない。

地球の生成から今日までを一年365日にたとえれば人類は12月31日午後11時07分に生れたと計算されるという。そんな新参者がいま地球を喰い荒している。私たちは自分の生命や健康については重大な関心を持ち必要あれば医家の門を叩く。地球が病んでいる今日だけがその傷を癒すのか。それをするのは人類以外にはいないのである。

一日の生活の中で僅かな時間でもよい、地球の、自然の修復に思いを致すことが求められる。身近などんな小さなことでもよい、そのための行動を起こすことが求められる。そんな局面を私たちは迎えているのである。